

KALS NEWSLETTER 72

2026年2月 九州アメリカ文学会

事務局 西南学院大学外国語学部外国語学科 藤野功一研究室内
〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新6丁目2-92

ローマが伝える人類の連續性

齊藤園子（北九州市立大学）

「ついに、生まれて初めて、わたしは生きています！（At last—for the 1st time—I live!）」と20代半ばのヘンリー・ジェイムズを夢中にさせたローマの街。ローマは、私自身、英国留学中に小旅行で訪れて衝撃を受けた街です。このたびそのローマに滞在して研究活動に邁進する機会をいただきました。ローマ・カトリック教会の重厚な歴史に裏打ちされた壮麗な大聖堂や教会に加えて、キリスト教以前の文化を伝える建築物や遺跡が随所に残る、歴史が層を成して現前する土地に身を置いた時間は夢のようでした。ただ今回の滞在は、サン・ピエトロ大聖堂の周辺の極めて稀な状況と重なることになりました。2025年は「ジュビレオ」と呼ばれる25年に1度のカトリック聖年で、様々な儀式や行事が続くタイミングだった上に、ローマ教皇フランシスコがイースターの翌日に逝去するという衝撃の事態が生じました。その後米国生まれの教皇レオ14世が選出されたことは、いまだ記憶に新しいのではないでしょうか。

ローマには、*Watch and Ward* の拙訳書『後見人と被後見人』（大阪教育図書、2019年）の取材のために、2017年、2019年にも短期で訪れていました。*Watch and Ward* はジェイムズによる最初期の作品のひとつで、雑誌（*The Atlantic Monthly*）に1871年に連載された後、1878年に単行本として発表されました。単行本の第5章の終わりから第6章にかけて登場人物が語るローマの描写はジェイムズ自身の感動を反映するかのように鮮やかです。ナサニエル・ホーリーの *The Marble Faun* が思い起こさせられるほど、実在の地名や場所が登場する箇所でもあり、作中で言及される場所を登場人物の言葉を思い浮かべながら歩くのもおすすめの作品です。

今回の滞在期間に探ってみたかった事柄の一つに、カンパニーニャ・ロマーナの面影があります。第5章でヒューバートが、ピンチョの丘の建物に借りていた部屋から毎日のように眺めた景色としてノラに語ります。第6章においてノラも、滞在先の部屋の窓から「私も同じ夕暮れのローマ、同じ藍色のカンパニーニャを眺めています」とヒューバートに書き送ります。ジェイムズのイタリア紀行文が集められた *Italian Hours* には、ローマのカンパニーニャに言及する箇所がたくさん登場します。特に印象的なのは、遠景の色合いと、カンパニーニャへの遠出の描写ではないかと思います。ジェイムズは、真冬のカンパニーニャが、やわらかな紫色の輝きに満ち、紫や青、美しい茶色が斜面を織りなしているとし、その光と影の移ろいをサファイアや琥珀になぞらえています。カンパニーニャには、徒歩や馬車に加えて、乗馬でも訪れています。馬の背に乗って田園地帯を楽しむジェイムズの姿は意外でもあり、頗もしくもあるように思います。

都市化により、ジェイムズが親しんだカンパニーニャの姿はもうありませんが、その面影を残す地域はまだ残っています。そのため、ジェイムズのカンパニーニャに接近しようと、ピンチョの丘やスペイン階段の上からジェイムズの言う紫色を捉えようとしたり、アッピア街道や水道橋公園、あるいはローマ近

郊の町へと足を運び、徒歩や自転車で散策したりしましたが、私が目にしたものは、ジェイムズのものに遠く及ばなかったように思います。しかしそれでも、かつてカンパニーヤが広がっていたと思われる地平の霞の中に浮かぶサン・ピエトロ大聖堂を望んだり、古代ローマ人の高度な技術を今も誇る遺跡、その遺跡に寄り添う笠松や糸杉、草花のある風景に入ることができたりしたのは幸運でした。

ジェイムズは *Italian Hours*において「イタリアで人はニューイングランドやイングランドよりも自然とともに生きている」と書いています。確かに、ローマでは今でも自然を身近に感じる生活が営まれているように思います。野外のテーブルでの食事やピクニックは日常生活の一部となっているようでしたし、夏には、カラカラ浴場やコロッセオといった古代ローマの遺跡を舞台にしたものを作りました。野外コンサートやイベントが様々な場所で開催されます。日本では考えられないような趣向のイベントも目白押しで、そうしたイベントを通じても、人生の楽しみ方を考えさせられました。しかし同時に、社会活動に対する意識の高さにも圧倒されました。国際女性デー、ファシズムからの解放を記念する「解放記念日」、メーデーなどの機会に、警察や憲兵隊を動員して大規模なデモ行進や集会が行われ、若者はじめたくさんの人々が参加するのです。

親日の方が多いことは心強く思いました。日本のマンガやアニメ、小説や映画への関心の高さはもちろん、書道や華道といった伝統文化に関わる教室も人気がある様子でした。私自身はラテン系の言語であるイタリア語との格闘でしたが、イタリア語と向き合う中で、ラテンアメリカ諸国をはじめ、様々な地域からの移住者と知り合うなど、英語だけでは知り得なかった世界を垣間見ることができたことは大きな財産です。折しも、学生と参加した模擬国連ガラパゴス大会はスペイン語圏エクアドルでの開催でした。模擬国連は学外研究課題の柱のひとつでもあったのですが、現地では、イタリア語の知識ゆえに多少スペイン語が分かる場合もあり、そのような時にはうれしくなりました。また短時間ながら首都キトの旧市街を訪れる機会がありました。起伏のある街路に建物が立ち並び、多くの人が行き交っています。イタリアと同様にカトリックの文化が根付き、荘厳な教会建築が散在する様子は圧巻でしたが、特に巨大な聖母像が立つエル・パネシージョの丘から望んだ、家々が周囲の丘を埋めつくし、陽光を反射している光景には心を打たれました。遠いように思われていた地球の一角が、たくさんの人々の息遣いで彩られた気がしています。

The Portrait of a Lady の終盤、イザベル・アーチャーにとってローマは、「人々が苦しんできた場所」としての意味を持つようになっています。イザベルは、オズモンドとの関係や自分の結婚の真相をマダム・マールに問うた後、ローマ郊外へと一人で遠出し、ヒナギクが生えるカンパニーヤで古代ローマの遺跡の中にたたずみます。イザベルには、古代ローマの遺跡は、悠久の歴史の中で蓄積してきた人々の苦しみと「人類の運命の連續性」を象徴するかのように感じられます。その中に身を置くことで、イザベルの苦しみは相対化され、溶け合い、和らげられるのです。

金色のまばゆい太陽と青い空、紺碧の地中海に恵まれた色鮮やかな国、イタリア。*Italian Hours*にはローマだけでなく、ヴェニスやフィレンツェをはじめ、イタリア各地についてのジェイムズの見解が残されています。私もジェイムズの言葉を参考に、できるだけ多くの土地を訪れようとした。しかし「ヴェニスの5月は4月よりも良いが、素晴らしいのは6月だ」とあっても、毎月訪れるわけにもいかず、6月に何とか慌ただしく訪れる、といった感じでした。研究拠点のローマ・サピエンツア大学(Sapienza Università di Roma)からは、研究課題のひとつについて研究費を授けていただきました。それはあたたかくも厳しい激励であるように思っています。ジェイムズがイタリアに注ぎ込んだ時間とエネルギーにはまだ及びませんが、今後少しづつ、追いついていきたいと思っています。

地区だより

《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

いつも活動のご報告をお寄せいただいている北九州アメリカ文学研究会は、今期は活動を休まれました。来期の活動の再開を目指しておられるとのことです。

齊藤からは模擬国連活動の関係でご報告させていただきます。2025年11月23日～28日に米国のNPO法人NMUNが主催する模擬国連国際大会がカナダのアルバータ州バンフにて開催されました。北九州市立大学外国語学部の学生有志4名がチームを結成し、齊藤の夏期集中講義以降は、授業外での準備を積み重ねて大会に臨みました。バンフはユネスコ世界遺産「カナディアン・ロッキー山脈自然公園群」に含まれるバンフ国立公園内に位置する町です。大会初日に合わせたように雪が積もり、雪をかぶった山々に囲まれ、一面雪景色となった会場で活動に従事しました。豊かな自然遺産を垣間見る機会（野生のトナカイやヘラジカにも遭遇して感激！）や、体験型ワークショップでカナダの先住民が経てきた歴史を追体験する機会もありました。米国とはまた異なるカナダの先住民を取り巻く環境を垣間見ることになりました。大会では学生の取り組みの成果が認められて、“Honorable Mention Delegation Award”という団体賞を受賞しました。北九州市立大学のホームページに報告記事を掲載しておりますので、ご覧賜りますと幸いでございます。<https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/2026/01/006348.html>

《熊本地区》

楠元 実子（熊本高専）

私の勤務校ではDX推進のため、出席管理や成績通知を含む「デジタル学生証」システムの運用が開始されました。教員はキーホルダー型のビーコンを携帯して授業に臨み、学生がアプリを通じてビーコンを受信して操作することで、出席や遅刻が記録される仕組みです。教員側の出席管理業務が大幅に省力化された点はメリットと言えます。

一方で、頻繁な変更や複数のシステムの並行運用により、学生への周知・説明には苦労しています。通信障害や設定間違いなどトラブル慣れてしまい「何とかなるだろう」と楽観視（あるいは思考停止）してしまう自分がいます。こうした変化が良いことなのか、少々疑問を感じています。

さてそれでは、前回以降に開催された熊本アメリカ文学研究会の活動についてご報告いたします。

○第172回(2025年9月20日) Zoom/熊本大学にて

題目：Velina Hasu Houston の多民族的な視点：生成AIを活用/紹介しながら *Kokoro (True Heart)* を読む

発表者：楠元 実子

司会者：池田 志郎

日系アメリカ人劇作家 Velina Hasu Houston の戯曲 *Kokoro (True Heart)*を対象に、彼女の持つ多民族的視点を「生成AIの活用」という新たなアプローチを援用して考察されました。生成AIツールの特徴を概説した上で、それらを用いた要約、背景調査、多角的な解釈の提示がありました。これにより、文学研究における生成AIの有効性を実証的に提示されました。

次に作家の背景についても言及があり、Houston自身の「アメラジアン」としてのアイデンティティが作品に色濃く反映されている点が指摘されました。

本作には死者の世界、神話、歌に加え、アメリカ社会への適応度が異なる日系人たちが登場し、文化間の葛藤や登場人物の心理的変容が描かれます。主人公ヤサコは、夫の裏切りや異文化不適応により一度は絶望しますが、周囲の人々や亡き娘の声を通じて自己を見つめ直し、詩作を通じて主体性を回復していきます。

こうした多様な要素の衝突と変容のプロセスを通じて、Houston は包括的な「多文化共生」の思想を提示していると考察されました。さらに、音声や画像を生成する AI を活用することは、この複雑な世界観を多角的に整理し、作品理解を深める上で有効な補助手段となりました。

参加者からは、移民の特徴、親子心中、裁判や世論の影響、川や海の描写、変わった名前の付け方などへのコメントがあり、互いを理解しようとする姿勢の重要性についても意見が交わされました。また、AI の活用方法について等、議論が広がりました。

なお、次回の第 173 回の会は延期が続いており、2026 年 4 月（日程は未定）の土曜日の開催予定となっています。発表者、参加者ともに募集中です。ご関心がある方は、メールで楠元（kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp）までご連絡ください。

《鹿児島地区》

千代田 夏夫（鹿児島大学）

鹿児島地区からのお知らせです。昨秋には千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）が、瑞宝中綬章を受章されました。長年のご功績に対しての栄誉、心よりお祝い申し上げます。また昨年度まで日本アメリカ文学会九州支部長を務められました竹内勝徳先生（鹿児島大学）がこの 3 月をもって鹿大を退職されます。最終講義が以下の次第で開催されますことを、お知らせ申し上げます。お問い合わせは英文学会でもお馴染みの大和高行先生（鹿児島大学）までお願ひいたします。

【竹内勝徳教授 最終講義】

演題：「ハーマン・メルヴィルと私の人生」

日時：令和 8 年 3 月 6 日（金）16 時～17 時（予定）

場所：鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 1 階 102 講義室

【問い合わせ先】竹内勝徳教授最終講義世話人 大和高行（法文学部人文学科多元地域文化コース）
yamato@leh.kagoshima-u.ac.jp

そして森孝晴先生（鹿児島国際大学）もこの 3 月で特任教授の任を終えられ、完全にご退職となります。実に 43 年の長きにわたる津曲学園でのご勤務でした。2 月 28 日（土）に鹿児島国際大学で最終講義が行われます。

【森孝晴先生 最終講義】

題目：「ジャック・ロンドンと鹿児島—黒木為禎、長澤鼎、椋鳩十一」

日時：令和 8 年 2 月 28 日（土）14 時～16 時

場所：鹿児島国際大学坂之上キャンパス 7 号館 710 教室

入場無料、予約不要

【問い合わせ先】鹿児島国際大学（099-261-3211）まで

ロマン主義から自然主義、モダニズムまでの見事な山並みが薩摩の地に息づいていたことに感嘆の念を新たにいたします。三巨頭からの大きなお知らせのあとに恐縮ながら、千代田は日本 F・スコット・フィッツジェラルド協会全国大会（関西学院大学梅田キャンパス 2025 年 8 月 31 日）における『グレー

ト・ギャツビー』研究会の一端として「咲き切つて薔薇の容を超えるも—なぜニックは薔薇と呼ばれたのか」という発題を行いました。

《沖縄地区》

加瀬 保子（琉球大学）

沖縄地区会員の最近の研究活動についてご紹介いたします。

日本アメリカ文学会の英文号（2005年）に掲載されました琉球大学の小林正臣先生の論文 “Steinbeck and Vegetarianism: An Ecocritical Perspective on *The Grapes of Wrath*”が Cengage Learning が発行する *Children's Literature Review*, vol. 292 に転載されることになりました。掲載予定日は今年の12月11日とのことです。小林先生の論文がより多くの研究者に紹介されることになり、大変喜ばしいことだと思っております。加えて、小林先生は10月25日に鹿児島大学で開催された日本英文学会九州支部第78回大会のシンポジウム「可視／不可視のナラティブ」では、コーディネーターとして司会・講師を務められ、藤野功一先生・鈴木一生先生・河野世莉奈先生をパネリストにお招きして、各自が注目する作品のナラティブに潜在する不可視の可視化を試みました。2025年のMLA基調テーマに触発された本シンポジウムは刺激と示唆に富み、フロアとのディスカッションも活況に終わりました。

加瀬自身の最近の研究活動についてもご報告いたします。1月8日から11日にMLAの年次大会がカナダのトロントで開催されました。今回は現地には行かず、“The Emotional Brain and Affect Theory”というオンラインセッションをオーガナイズし、司会も務めさせていただきました。ミネソタ大学の脳科学者 Janet M Dubinsky 先生を招き脳科学分野から情動とは何かということをお話ししていただき、私と香港の人文系の研究者が共に発表いたしました。私の発表論文では情動研究で有名な脳科学者 Joseph LeDoux の扁桃体研究がどのように人文系研究者に誤用されてきたか、脳科学と人文系研究者の「感情」や「恐れ」といった概念の解釈に違いに注目しました。現地時間では早朝でしたが、20人以上の参加があり、情動研究に興味のある研究者達と活発な意見交換ができました。

最後に沖縄地区委員の交代について、この紙面を借りましてお知らせしたいと思います。2020年より加瀬が地区委員を務めて参りましたが、2026年度4月より小林先生が沖縄地区委員をお引き受けくださることになりましたのでご報告いたします。小林先生を中心に引き続き沖縄地区では研究活動の充実に務めていきたいと思います。

《長崎地区》

生田 和也（長崎県立大学）

長崎より近況をお知らせいたします。

みなさまご存じのように2025年12月20日、21日（日）に九州アメリカ文学会12月例会と多民族研究学会第44回全国大会との合同大会が開催され、シンポジウム「<排外主義>の時代における人文学」に鈴木章能先生（長崎大学）が登壇されました。また鈴木先生は Palgrave McMillan から *Writing, Retelling, and Critically Reading Children's and Young Adult Tales*（共著）を出版されました。今回の論文ではディズニー現象にもふれながら日本の文学を扱われています。

また遅ればせながら生田は2025年7月にパリにて開催されました第4回国際ポー・ホーソーン会議にて“Child Vulnerability in ‘The Gentle Boy’”と題した研究発表をいたしました。被害と共感との関係性をめぐる本論考は、上記の12月のシンポジウムとも深く関係する部分があり、いずれも大変刺激的な学会参加となりました。

九州アメリカ文学会第 71 回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第 71 回大会を、以下のとおり開催いたします。

日時：2026 年 5 月 9 日（土）、10 日（日）

会場：西南学院大学

特別講演：吉田恭子先生（京都大学）

シンポジウム：「アメリカ文学における性と生殖（仮題）」

司会/吉田希依先生（熊本県立大学）

登壇者/高野泰志先生（九州大学）、森慎一郎先生（京都大学）、戸田慧先生（広島女学院大学）

下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。

締切：2026 年 2 月末日

提出先：鈴木一生（九州工業大学） isseisuzuki183@gmail.com

レジュメの様式：日本文の場合 500-800 字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。英文の場合は 300 語程度。作家名と書名は原則として原語綴りに統一。

日本アメリカ文学会第 65 回全国大会発表者募集

日本アメリカ文学会の第 65 回全国大会（2026 年 10 月 10 日（土）、11 日（日）開催予定、於：福岡大学）にて研究発表を希望される方は、以下の要領でレジュメを提出ください。

1. 締切：毎年 3 月 31 日（九州支部事務局必着）。
2. 提出先：九州支部事務局 k-fujino@seinan-gu.ac.jp
3. A4 横書きのレジュメ（和文の場合 1200 字程度、英文の場合 400 words 程度）と略歴を、次の方法で支部事務局に提出すること。なお、発表タイトルと氏名は英訳したものを併記し、作家名と書名は原則として原語綴りに統一すること。なお、提出に際して、以下の点を再度確認すること。
 - ・レジュメ・題目における作家名、作品名は、「原語綴り」で記入。
 - ・「取り上げる作家名」「作品名（発表・出版年、ジャンル）」を忘れず記入。
 - ・その他の表記についても、会誌『アメリカ文学』に準ずる表記法・書式（英語人名・書名等は英語表記、作品出版年、作家生没年の情報など）に統一する。
 - ・申込者は本部会員であり、かつ九州支部経由で本部会費を納入している必要がある。
 - ・非常勤出講先が複数ある場合は、代表となる一校のみを記載。
4. 略歴は次の項目を記載してください。
 - ・氏名
 - ・住所（郵便番号をつける）
 - ・e-mail address および電話番号
 - ・最終学歴
 - ・現在の所属（非常勤講師は（非）、院生は（院）とつける）
 - ・研究業績（過去 3 年間の口頭発表、掲載論文はタイトル、発表年月日、掲載誌を記すこと）
5. 全国大会開催支部以外の支部に所属している現役大学院生ないし申請時に大学院修了または退学後 3 年以内で常勤職を持たない会員で大会において研究発表を行う者に対して、本部より一

人一律2万円の旅費を補助いたします（「本部会費」を納入している支部が「所属支部」となります）。申し込みについては支部を通じて手続きや連絡を行うことになります。上記4の略歴によって申請条件を判断しますので、最終学歴と現在の所属を明確に記載するようにしてください。

6. その他：Word で作成したレジュメと略歴のファイル（.doc または .docx）をメールに添付し、支部事務局へ送信する。レジュメのファイル名は、「全国大会_レジュメ_自身のフルネーム」、発表者略歴のファイル名は、「全国大会略歴_自身のフルネーム」とする。カギ括弧を必ず付ける。

九州アメリカ文学賞（新人賞）応募方法

電子メールによる応募のみの受付です。以下の宛先まで原稿をお送りいただきますようお願ひいたします。

締切：2026 年 2 月 20 日（金）

提出先：永川 とも子（九州大学） tmknagakawa@flc.kyushu-u.ac.jp

投稿規定：https://www.kyushu-als.org/userfiles/news_contents/UA9NjYpAQonxtEoEI9pd.pdf

*件名に「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

九州アメリカ文学会出版助成金

標記助成金への応募につきましては、2026 年 1 月 14 日発行の ML(件名：[kalsjapan] 2026 年 年頭のお知らせ)で通知いたしました通り、2026 年 1 月 31 日に締め切らせていただきました。この度は残念ながら応募がございませんでしたので、ご報告いたします。下記に来年度の申請締め切りをお知らせいたしますので、ご応募いただきますよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

締切：2027 年 1 月 31 日

提出先：九州アメリカ文学会事務局 藤野功一（西南学院大学） k-fujino@seinan-gu.ac.jp

*件名に「九州アメリカ文学会出版助成金応募」と明記して下さい。

2026 年度日本英文学会第 98 回全国大会

2026 年度日本英文学会第 98 回全国大会は、2026 年 5 月 16 日（土）および 17 日（日）に同志社大学（今出川キャンパス）で開催予定です。

編集後記

今号には齊藤園子先生にイタリアでの在外研究について冒頭コラムを寄せていただきました。イタリアのヴィヴィッドな景色が目に浮かぶ充実のコラムをお寄せいただき、この場を借りてお礼申し上げます。また各地区・事務局の寄稿者のみなさまにもあわせて感謝申し上げます。今後も Newsletter が会員のみなさまの良い情報共有の媒体となるよう努めてまいりたいと思います。お気づきの点などありましたら、お知らせください。（生田）